



本番前のけいこ。プロの俳優が見守る中、ヘルパーら介護職が表情豊かに熱演。衣装も小道具も使わない＝群馬県高崎市

伝われ 介護の喜び

ヘルパーら、芝居で思い表現

芝居の出前を手がける東京の俳優の団体「お芝居デリバリーまりまり」が、介護職の本来の喜びや志を、芝居の力を借りて表現する試みを始めた。今年度は介護事業所と協力し、全国3カ所を実施。きつい、汚いといった負の側面が語られがちな介護職だが、イメージアップにつながることを期待されている。

(森川敬子)

「むかし昔、ニンジン、大根、ゴボウは泥だらけでした。介護に直接関係のない物語を、現役のヘルパーたちが、野菜になりきり、踊り、生き生きと演じていた。」

2月、群馬県高崎市で介護事業を手がけるNPO法人「ハートフル」が前橋市や桐生市で開いた「介護応援セミナー」のひとつ。介護職に就きたい人や学生を対象に、介護職の人間性や仕事のすばらしさを伝えるために、「お芝居デリバリーまりまり」が演出を担当した。

まずはプロの俳優が、生きることを死をテーマにした民話を、衣装も小道具も使わずに演じ、人の心の深い部分を掘り下げる。続いてヘルパーらの楽しそうな劇。演じたあとで、1人ひとりが紅潮した顔で「人を元

プロの俳優が出前で演技・指導

気にさせ、生き生きさせ、私たちが元気になる仕事です」「一生懸命生きている姿を間近で見られる。仕事が誇りです」と介護への思いや喜びをアピール。最後は「うんとこしょ、どっこいしょ」と聴衆も一体となって「大きなかぶ」を引っかく。大きなかぶは高齢社会を象徴し、介護職をみんなで支えようというメッセージが込められている。

「まりまり」と介護を結びつけるきっかけを作ったのは、NPO系の介護事業所などによる「市民福祉団体全国協議会」専務理事の田中尚輝さんだ。芝居の明るさが伝わってくる。「大きなかぶ」では力を合わせて助け合う意味が実感としてわかった」と話す。

「まりまり」は東京で活動する俳優数人で05年に結成。国内外の福祉施設や学校などに「出

前興行」をしてきた。メンバーの中には福祉施設で働く者もいる。「まりまり」の芝居を見た田中さんの提案で、福島、香川、群馬の各労働局の委託事業として、介護事業所が開くセミナーや就職面接会の企画演出を「まりまり」が担当した。

福島市ではデイサービスの大広間に近所の人が観客として集まり、スタッフもボランティアも利用者も出演。高松市では就職面接会の介護事業所の各ブースを芝居形式で紹介し、面接官や求職者も出演するなど、目的や場所に応じて演出も変えた。各地の大学や高校、保育園、商店街など30カ所近くで、参加型のお芝居会を開いた。

「介護職に興味を持った」という感想のほか、「これから介護の仕事に就くので不安だった」「勇気と自信をもらった」「自分がめざす職業を誇りに思えた」という学生や、「生きることが、老いることを感じることでできた」「介護のイメージが明るくなった」といった感想が多く寄せられている。

「まりまり」メンバーの萩原ほたかさんは「人とかかわる喜

びが介護の核心にあることを表現したかった。芝居で空間を共有することで一体感が生まれる」と話す。

介護職の離職率は高く、1年間に18・7%が辞めていく。平均給与は月約21万6千円で、全産業平均の66%。「もちろん待遇の改善は必要。でも、まず介護の理解者や応援団を増やしたい。それは働く人の元氣にかかわることだから」と萩原さんは言う。ミニお芝居会(約15分)の出前なら3万円から。問い合わせは「まりまり」ホームページ(<http://white.ap.teacup.com/marimari/>)へ。